World Navi

ワールドナビ Vol.50
2026 SPRING

Navi対談

痛恨と失敗が続いた日本の外交史
半世紀の対中政策から教訓を得るとき

参議院議員 石 平 × 公益社団法人 国際経済交流協会 総裁 米田 建三

特　　集 埼玉県初となるインドネシア国籍の特定技能外国人ドライバーを東総運輸が採用

社団レポート 外国人技能実習生情報

寸　鉄 憲法9条改正論議　維新の主張「自衛隊は『国防軍』に」が正しい　米田 建三

疾　風 伝統を尊び、皇位の男系継承踏まえた皇室典範改正を　産経新聞社上席執行役員論説委員長　榊原 智

好評配信中
政治・経済・文化・社会の動向を解明するコンテンツ　YouTube 米田建三の日本再興チャンネル 検索

Navi対談

聞き手
公益社団法人 国際経済交流協会
総裁 米田 建三

参議院議員
石平

痛恨と失敗が続いた日本の外交史
半世紀の対中政策から教訓を得るとき

米田　今日はお忙しいところありがとうございます。昨年の参院選でのご当選をうれしく思った一人です。

石　それは大変光栄です。

米田　石先生が選挙への出馬を表明された際、中国から帰化していることが、若干の議論になりました。私は、それはまことにおかしなことだと思いました。

国家とは何かと問われるならば、私は「その国を愛し、そこで生き、その土に成ることを決意した人々による生存共同体」だと思います。人種の問題ではない。元々、純粋な何々人などというものは存在しない。歴史を振りかえれば、この日本列島も様々な人々が渡来して、この国を作ってきた。渡来が早かろうが遅かろうが、問われるべきは日本への愛です。その意味で、石先生は十分に国会議員の有資格者だと思っておりました。

さて、中国はいわゆる「中華帝国主義」という覇権主義的体質を持っていますが、普通に振る舞えばいいのに、なぜみんなに嫌われることをやっているのでしょうか。

石　一点目は、歴史上、中国大陸にはいろんな国がありましたが、（天下統一を目指した）春秋戦国時代（紀元前770年～紀元前221年）にも、「中国」という国は存在していませんでした。

その後、紀元前221年に秦の始皇帝が国を統一して大帝国を作り上げたわけですが、「中国は大帝国でなければならない」「中国という国は統一されなければならない」という政治的信念がいわば執念になっているのです。

例えば、周辺の民族の土地を占領し、無理やり組み入れ、それでもまだ足りず、台湾も「我が領土」と主張して統一しなければならない、と。私からすれば、間違った、しょうもない伝統があるんです。

さらに、もう一つ、「中華思想」があります。中華が世界の中心であり、世界の頂点でなければいけないという、皇帝を中心とした同心円的な世界観があるんです。

中国は近代になるまで、明王朝にしろ、清王朝にしろ、国境という概念がありませんでした。なぜなら、すべての土地は理論的に中

「アホの壁」で自滅する中国経済
高橋洋一・石平［著］
ビジネス社［刊］

国の皇帝のものですから。国境がないから、国旗もない。国旗は自分たちの国と、よその国を区別するためのものであって、世界はすべて中国のものですから。

中国が一つの国という意識もありませんでした。天下の土地はすべて皇帝の土地であり、人々は皇帝の臣民でなければならない。そういう意味で侵略の概念もないわけです。すべて自分の土地ですから「侵略」はないんですよ。

米田　なるほど、ローマ帝国とちょっと似ているところがありますね。

以前、中国の桂林を旅したとき、ガイドの方がチワン族だったんですが、中国には65以上の言語があると言っていて驚きました。

石　中華思想の中で、「中華民族」という概念を生み出したのです。漢民族、チベット人、ウイグル人、チワン族はいても、中華民族はどこを探しても存在しませんよ。一種の政治的架空の概念です。

つまり、「サラダボール」のような器です。どんな民族もこの器に入れたら「中華民族」になってしまう。しかし、独自の歴史、伝統、文化をもつチベット民族も拒否することもできないわけです。もし異を唱えれば、弾圧されてしまいますから。その論理でいけば、例えば、中国が日本を占領したら、日本人は中華民族になるわけですよ。

米田　かつて中国は日本の一地域の王に対し「漢委奴国王（かんのわのなのこくおう）」の金印を与えましたね。属国扱いです。倭王武の中国皇帝に対する上表文を読んでも、中国の官職を与えてくれ、なんて言っている。政治的判断で日本側は属国のフリをしただけなのだが、それをタテに、日本は元々中国領と言い出しかねない。

石　昔の中国の世界観で、「天子」と称することができるのは、天の子である中国の皇帝だけでした。天の代わりに天下を治めるわけです。天下の範囲がどこまでかといえば、どこまでも天下なんです。日本にしても朝鮮にしても、中国の属国というわけです。

幸い日本人が目覚めて、聖徳太子が煬帝（隋の第2代皇帝）に遣隋使を通して国書を送りました。「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す」。日が昇る国の天子が、日が沈む国の天子に手紙を送ります、と。そこで初めて日本も「天子」だと称して対等な立場を示しました。中国にとって、これほど不愉快なことはなかったでしょう。

米田　中国独特の概念を持つのは支配層だけでしょうか。それとも国民にもだいぶ浸透していますか。

石　皇帝、知識人、官僚にとっては常識であり、固定概念でした。

近代に入って、西洋世界が存在することが分かり、イギリスが自分たちの臣下とはいえなくなった。実際、大英帝国に敗戦したのですから、外の世界も認めなければならないわけです。

だからイギリスやフランスが入ってきて、初めて清王朝が国旗を使ったんです。自分たち以外の国があることを認めざるを得なくなった。しかし、本心では自分たちが中心であり、上に立つべき存在であるという中華思想を持ち続けたのです。現在はさすがにアメリカを中国の属国とは言いませんが、しかし、自分たちこそが中心という考えは共産党政権でも見事に受け継がれました。「西太平洋を中国に」と習近平国家主席がアメリカに対して主張していることからもうかがえます。

たとえば1949年に中華人民共和国の建国宣言をした毛沢東（初代最高指導者）、周恩来（首相に相当）の時代、色々な国と国交を結びました。面白いことに、毛沢東も周恩来もソ連以外、訪問したことが一度もない。外国の首脳が北京にくるんです。田中角栄首相にしてもそうです。

米田　「キッシンジャー秘録」を読みましたけれど、毛沢東は訪中したニクソン大統領とキッシンジャー国務長官を書斎に招き入れ、完全に上の立場から論すような様子でしたね。

石　そうです。毛沢東からすれば、自分はニクソンよりも格上なので、カウンターパートとして周恩来を差し出したわけです。

米田　テレビでその様子を見ましたが、ニクソンが小さく見えましたよ。本をいっぱい積んだ書斎で教養を見せつけ、会話も毛沢東や周恩来の方が上から目線。そういう意味では中国は大国なんですね。でも、すべて支配できると思うのは妄想ですね。

石　少なくとも彼らの認識ではアメリカ以外は物の数ではないと思っています。日本も台湾もフィリピンも、対等の主権国家であるとは思っていません。

米田　今までの日本の外交は全くだめでしたね。私は議員時代、安全保障と外交政策は国会議員の必須科目と認識していました。同期当選の安倍さん（晋三元首相）と一緒にやっていたころの自民党はひどくて、全く芯が通っていなかったんです。

例えば、党の国防部会でも、私や安倍さんが、戦後体制を脱却して主体的な防衛力の強化を主張すると、「米田という変な右翼がきた」「安倍晋太郎の息子は右翼になったのか」などと長老たちに陰口をたたかれたものです。

もっとひどいのは外務省でした。私は中国に対する過剰なODA（政府開発援助）に反対してきました。中国国民のためになるどころか、中国共産党への支援であり、共産主義の独裁政権を続かせてしまうからです。しかし、当時、ある親中派の外務官僚がきて「中国の融和政策は世界のトレンドだから」と私に説明するので驚きました。国益でなく、「トレンド」で外交をすると言うんですよ。

石　私も先日、元外務審議官の田中均さんと国会の場で論争しました。参議院の国際問題調査会に参考人として来ていただいたのですが、高市政権の対中政策を批判し、中国とは良い関係を築くべきだという趣旨の発言をしました。外務官僚が日本の国益を損なってきたのに、いまさら中国を大事にしろなんて、歴史の教訓を無視していることに、正直、腹が立ちましたよ。

1972年に国交を結んでからの半世紀、中国と良好な関係を築くために、日本はどれほど中国に配慮してきましたか。その結果、世界最大の反日国家であり、日本にとって手に負えない最大の軍事脅威を生み出したのです。

私からすると、痛恨と失敗の外交史としか思えません。田中角栄首相が中国と国交回復する際、本来ならば、尖閣諸島に対する領土要求を取り下げてもらわなければいけなかったんです。毛沢東に騙されて棚上げされたまま、いまも日本を苦しめています。

鄧小平（第二代最高指導者）時代の1980年代、日本は国をあげて中国の近代化を支援し、ODAを相当額注ぎ、日本企業が投資をしてきました。

中国がWTO（世界貿易機関）に加盟しようとしたとき、一番後押ししたのが橋本（龍太郎）政権です。1989年の天安門事件で、中国共産党政権が自国の若者たちを戦車で轢くという暴挙に出たとき、日本は西側諸国と一緒に制裁を発動したにもかかわらず、率先して解除してしまった。

米田　あれは中国の人民による民主化の絶好のチャンスでしたね。一歩手前までいっていたのに、日本が包囲網を破ってしまい、天皇訪中までやってしまったわけです。

石　そうです。私は一番罪深いのは当時の宮沢（喜一）政権だと思いますよ。江沢民（第三代最高指導者）中国の工作を受けて、天皇陛下のご訪中を決めました。当時の外相の銭其琛（センキシン）が回顧録で明白に書いています。天皇の訪中が国際社会での孤立状況を打破する最大のきっかけをつくった、と。

米田　政治工作は大成功だった、と。ばかにされているわけですね。

石　そうです。しかも日本からの援助、恩恵を受けながら、気に入らないときはたたく。鄧小平は来

日して日本の援助をもらう一方、中曽根（康弘）首相の靖国神社の公式参拝を批判しました。

江沢民は国際社会に復帰したとほぼ同時に、反日教育を始めました。日本ほど都合のいい国はありません。必要なときに天皇陛下も、援助もくるし、たたいても文句は言わない。そんな都合のいい国が世界のどこにありますか。

米田　その源流が秦の始皇帝の時代からあるというのは、根深いですね。

石　昔の日本人には気概がありました。モンゴル人による中国の征服王朝「元」が日本に攻めてきた元寇（1274年、1281年）では鎌倉の武士たちが立ち上がりました。日清戦争（1894年～1895年）では清王朝を完全に打ち負かした。朝鮮の独立を勝ち取ったのも日本人です。日清戦争の結果、「下関条約」（日清講和条約）を締結し、朝鮮を永久に独立することを約束させたんです。それと比べると、1972年以降の対中外交は本当に理解できないんです。

米田　歴史を振り返ると、アジア一だった清の北洋艦隊を相手にした日清戦争も、明治政府にとって相当な挑戦でした。長崎に寄港した艦隊水兵が街に繰り出して乱暴狼藉をはたらいた長崎事件を受けて、日本国民は憤慨したけど、我慢し、艦隊に対抗できる軍艦建造のために国民がカンパしたくらいです。そういう意味では明治維新を経験したという実際の武力闘争の渦中に身を置いた当時のリーダーたちは、我慢に我慢を重ね、力がついてから反撃しました。一方、昭和のエリート軍人は力がなくても戦争を始めてしまったんですよね。政治家や官僚など、指導層にしっかりした戦略がないと国が滅びる。

石　戦略にしても愛国心にしても、戦後の日本はとても同じ国とは思えないほど腰抜けになっています。

米田　先ほども述べましたが国家というのは、その国を愛し、そこで生き、そこの土に成ることを決意した人々による共同体です。

そして今日の国際政治の枠組みからして、個人の利害は所属する国家の利害に直結する。だから、国益は何としても守らねばならない。その当たり前の考え方が、戦後の日本の指導層だけでなく、国民にも欠けていた。

国益軽視の元凶として、戦後の思想潮流がある。戦前の日本は、軍部が天皇統帥権といういわば形式的概念をタテに政府の方針を無視して暴走した。また左翼や自由主義者に対する過剰な弾圧もあった。その反動で戦後、「知識人イコール左翼」という知的世界での左翼の権威が長かった。

私が育ったのは長野県の田舎です。公共図書館には「今日のソ連邦」や「人民中国」の日本語版が日本の各新聞と一緒に並べられていました。子どもの頃から目にしていると、「ソ連や中国は素晴らしい国だ」と思ってしまう。

私は子どもだったが、ロシア兵は数の勘定もできないとか、ロシア兵に時計を盗まれたとか、シベリアで捕虜になった人たちの話を耳にし、「共産主義国家なんて理想的なもんではないな」と気づくんです。しかし、大多数は左翼教育をずっと受けてきて、「社会主義メルヘン」がこびりついているわけです。

いまの若い世代には、社会主義、共産主義は独裁国家という概念が強いから、メルヘンがない。現実をみている若者たちは「中国は悪い国ではないか」「中国に対して生ぬるい政党はだめだ」となり、高市政権が誕生した。これは大転換です。

憲法、武器輸出、非核三原則見直しが必要な大転換期迎える

石　日本が抱える病巣の一つが日本人の中国文明に対するコンプレックスです。

私は今、奈良に住んでいますが、日本は飛鳥時代から中国の文化、文明を取り入れ、アレンジして日本文化の一部にしています。例えば、明治に活躍した思想家、岡倉天心の有名な言葉に「アジアは一つ」がありますが、インドで発祥し、中国、朝鮮半島に伝わった仏教は日本で開花し、いまも日本人の心を支えています。インドでは廃れてしまいましたし、中国、朝鮮半島にも本物の仏教はありません。また、仏教と神道も融合させています。中国の文明は、実は日本にあるんです。

米田　中国の知識人はみんなそう言いますね。中国の古い文明はもう中国にないけれど、日本に残っている、と。

石　中国人に大きな影響を与えた「論語」はキリスト教の聖書みたいなものですが、来日して驚いたのは書店に論語コーナーがあったことです。論語が一番読まれているのは日本です。論語は礼儀を大切にしていますが、その伝統を受け継いでいるのは日本人だと、中国人も知っています。中国の文化を破壊したのは中国人自身ですから。日本は中華文明に対してコンプレックスをもつ必要は一切ありませんよ。むしろ、成熟させて開花させたことを誇りに思うべきで、中国人に中華文明を教える立場だと思います。

もう一つは、戦後の日本の知識人の共産主義に対する幻想です。1960、70年代に日本で出版された中国に関する書籍を多く読みましたが、ひどいなと思いました。「文化大革命」（1966年～1976年）を手放しで礼賛する日本の知識人がいっぱいいたんです。中国の知識人はあのとき何千万人も殺されたんです。

米田　米軍基地に対する反米ナショナリズムもあったから、それが中国礼賛につながった面もあるでしょうね。

1970年代初頭、私は大学生で、まさに左翼思想の洗礼を受けた世代です。「左翼でなければ人にあらず」という感じで、周りはほとんど左翼でした。私も「共産党宣言」をはじめとする左翼文献をずいぶん読みました。毛沢東の著作も読んだ。

しかし、どう読んでも、結局、共産主義は独裁政治をもたらすとしか思えなかった。当時は「毛沢東語録」を振りかざす毛沢東派が日本にもいたような時代でした。そのころの左翼青年が政治家や役人になった。最近ようやくその世代が社会の第一線からいなくなった。だから高市さんはラッキーです。

石　なるほどね。あともう一つ、日本人は贖罪意識が強いじゃないですか。旧日本軍が罪を犯した、だから贖罪しなければならない、と。もう戦後80年ですよ。

米田　おっしゃる通りで、中国の歴史のなかでは19世紀末から20世紀前半が「国恥時代」となっていますが、国家と国家の歴史には攻めたり攻められたりという事実があるわけです。日本国家の成立初期には中国大陸や朝鮮半島から大勢の人が来ている。必ずしも平和的な移住だけではないだろう。1274年と1281年の元寇はまさに中朝連合軍の日本侵略です。

石　中国の問題はそこですよ。頂点を極めたあとに西洋列強でいじめられて転落、屈辱の歴史を清算しなければならないという、逆の意味でのコンプレックスがあるわけです。

日本人は日本人で、戦前の日本

は全部悪い、だから否定しなければならない、中国に対して平身低頭でなければいけないという歴史の束縛がある。ここから脱出しなければならないんです。今の時代、そんなことはもう関係ないんですよ。いまの国際秩序の中で平和をどう守るかを普通に考えればいいんです。

米田　ちょうどいまの18歳から20代の高市政権を支持する世代が、そういう束縛から解放されつつあるんだと思います。

　話は変わりますが、日本の安全保障をどう強化するか。いわゆるスパイ防止法案についてどう思いますか。

石　制定は不可欠です。スパイ防止法と、秘密情報を収集し分析するＣＩＡ（米中央情報局）の日本版のような組織は、当然必要です。先進国の中でも日本はスパイ天国です。敵対国からのスパイを防止できなければ、同盟国からも信用されません。

　防衛装備品の輸出規制５類型もおかしな話です。日本人は自らの手足を縛ることばかりやっています。そんなことはやめましょうよ。

米田　紛争しているところへの武器輸出には慎重を期すという議論もあるようだけど、国会で厳しく追及してください。本当は紛争しているところが一番武器を必要としています。

石　例えば、ウクライナが侵略されたときこそ、武器を必要としています。日本にとって民主主義を守ろうとする戦いは助けるのが当たり前です。

米田　イラクがクウェートに侵略したとき、日本が金だけ出したと批判されたのと同じです。

石　友好国が侵略されたときに物心両面で支援するのは当然のことですから。

米田　「戦争中だけれども見過ごせない」ということで、ちゃんと閣議決定をしてシビリアンコントロールした上で武器輸出すればいいんですよ。

石　個人的には、非核兵器の三原則「核兵器を持たず、作らず、持ち込ませず」もおかしい。

米田　私も滑稽だと思っています。核兵器でやられた国なら、「持たない」でなく、「持とう」と思うはずなのに。

石　核兵器は使うものでない。相手に使わせないための武器なんです。こちらが持っていれば相手は使うことはできない。誰も使わないのが核兵器です。一斉に核兵器がなくなれば理想ですが、それは無理。習近平をいくら説得しても絶対に放棄しません。

米田　占領国が見事に日本人の洗脳に成功しているわけです。極東国際軍事裁判で日本側の無罪を主張したパール判事が戦後、広島を訪ねた時、落胆したという話があるんですね。広島平和記念公園の原爆死没者慰霊碑に刻まれた「安らかに眠って下さい　過ちは繰返しませぬから」というのを見て、日本人はこんなに情けないのか、被害者なのに謝っている、と。これはアメリカに言わせないといけないセリフです。

石　私も意味が分かりませんね。過ちを繰り返さない、とだれのことを書いているのかと。

米田　日本の国策の間違いもあります。物理学者の仁科芳雄博士は戦前、核兵器を研究していました。しかし、当時の軍部が重視せず、開発が遅れ、アメリカが先行した。もし成功していたら、逆に日米が歩み寄って和解していたかもしれないのです。

石　極端にいえば、１９４５年７月の時点で日本がアメリカ本土に届く核兵器を何発か持っていれば、長崎、広島への原爆投下はなかったのです。

　もう一つ、憲法はどう考えてもおかしい話です。「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」とあるが、すでに持っています。素直に読めば、憲法がうそをついていることになってしまう。

米田　戦後国際法の大原則は、個別戦争禁止、自衛の戦いはＯＫです。自民党は「自衛隊」を明記と言っているが、もし将来、自衛隊の呼称を変更したら憲法改正がまた必要になってしまう。だから自衛のための実力組織という表現にすればいいと思いますが。

石　日本維新の会は「国防軍」です。

米田　それはいいですね。私もほんとうはそう思う。ぜひお願いします。

石　さらにいえば、前文に日本の伝統、理想、理念、哲学が何にも入っていません。憲法そのものに日本の魂を入れないと。戦後80年、ずっとさぼってきたことを一回きちんとやらなければならないと思います。

米田　憲法は、アメリカのニューディール政策のときにはしゃいだ左派がマッカーサー（日本占領連合国最高司令官）に呼ばれて、１週間か10日で適当に作ったものですから。日本のジャーナリストがだいぶたってから当時の人たちを訪ねたら「まだやってるの」とびっくりしたという話もあります。

石　１９５２年にサンフランシスコ平和条約を発効した翌日にでも改憲しないといけなかった。やっぱり自民党がだめなんですよ。そもそも憲法改正を党是としてできた政党なのに、これではいつまでも「やるやる詐欺」ですよ。

米田　さて最後に、外国人政策についてですが、我々の社団法人は外国人材の受け入れが事業の柱の一つです。その経験を踏まえても、単純な排外主義は絶対ダメだと思っています。それは歴史に対する無知、無教養の結果だからです。日本の民族は単一民族であり外国人は厄介だ、という科学と歴史的事実に反する妄想を捨てないと、日本の発展はないでしょう。現実に鎖国時代を除けば、日本と海外の人的交流は盛んだった。

　石先生のように、日本を愛し、日本の土になろうとする人間はみんな「日本人」なのですから、良き人は受け入れ、悪い人はスパイ防止法などでハードルをつくって整理することが大事です。

石　私自身も帰化した者ですが、飛鳥時代から多くの渡来人が日本にきていますし、渡来系氏族の秦氏は松尾大社と伏見稲荷大社神社も建造しています。平安時代の貴族の３分の１も渡来人といわれています。

米田　日本という国と日本人がもともとあったのではなく、いろんな所から海を渡ってきた人々が日本を造ってきたのです。先人の汗と涙と血の結晶が国家であり、日本なのです。この事実にこそロマンがあるのではないですか。

石　出馬したとき、「日本人の血をひいてない」と批判されましたが、私からすると「日本人の血はどういう血ですか」と聞きたい。

　今の外国人問題は、日本のルールや価値観を受け入れて社会に溶け込むのではなく、自分たちの社会をつくり上げ、異質な文化的習慣をつくって生活している点です。最悪の場合、火葬が嫌だから土葬にしてくれ、などと自分たちの価値観を押し付けています。筋違いでしょう。

米田　公共自治体に集団で要求したりするのは異様ですよね。私にはイスラム教のトルコ人の友人がいますが、彼は「日本は断固拒否しなければならない。日本に来たら日本のやり方に従うべきだ」といっていました。

石　日本はこれまで外国人政策について腰を据えてやってきていません。労働力不足という単純なご都合主義と経済的合理性ばかりを考えていました。でも人間ですから、単純な「労働力」ではないんですよ。

米田　我々の団体は中小企業とのお付き合いが多いのですが、つぶれたり、廃業したりする会社がすごく多い。後継者がいないからです。良き人にはどんどん日本に入ってほしいが、国の方針が明確ではないですね。

石　何のために外国人を受け入れるのか、国家百年の計、千年の計から考えなければなりません。

米田　帰化の要件も緩すぎます。作文を書いて、意外に簡単にとれたという話も聞くのですが。

石　そうです。安易に日本の国籍を取得できるようにしてはならないと思います。収入があって、生活基盤が安定していて、前科さえなければ、日本人になれるのですから。

米田　日本の歴史の大転換期における課題は多くありますね。今日は大変興味深いお話をありがとうございました。

（対談日　令和８年３月11日）

Vol.50　対談者　PROFILE

参議院議員
石平
セキ ヘイ

１９６２年、中国四川省成都市生まれ。84年に北京大学人文学部哲学系卒業。91年に神戸大学大学院教育学研究科修士課程学位取得修了。95年に神戸大学文化学研究科博士課程単位修了退学。作家、評論家を経て、２０２５年７月に参議院全国比例区から出馬し当選。現在は日本維新の会 参議院議員。

公益社団法人 国際経済交流協会
総裁
米田 建三
ヨネダ ケンゾウ

１９４７年生まれ。週刊誌記者、横浜市会議員を経て、93年に衆議院議員に当選。北海道開発総括政務次官、防衛政務官、内閣府副大臣等歴任。帝京平成大学教授を経て、現在は 公益社団法人 国際経済交流協会総裁、藤田医科大学客員教授を務める。外交・安全保障政策の論客として、議員在職中は、北朝鮮による拉致被害者救出議連や外国人参政権反対運動等の中心メンバーとして活躍。その後も、一貫して国益擁護のための活動を行っている。

埼玉県初となるインドネシア国籍の特定技能外国人ドライバーを東総運輸が採用

深刻な人手不足が叫ばれる物流業界において、埼玉県蓮田市に拠点を置く「株式会社東総運輸」が、在留資格「特定技能」を持つインドネシア国籍の外国人ドライバーを採用した。同社は当協会とともに2024年10月から現地調査を行い、2025年4月に現地で会社説明会、現地面接を行っている。

2025年11月にインドネシア人の特定技能外国人ドライバーを迎え入れ、2026年1月にも2期生が入社するなど、次代の物流を担う「グローバルドライバー」の活用をいち早く本格化させていた。

現在、運送業界は、時間外労働の上限規制に伴う「2024年問題」やドライバーの高齢化により、慢性的な人材不足という喫緊の課題に直面している。この危機を打開するため、政府は外国人労働者の在留資格「特定技能」の対象分野に「自動車運送業」を追加し、門戸を開いた。

東総運輸の今回の取り組みは、この新制度を素早く現場に取り入れた先進的な事例であり、県内の物流業界に新しい風を吹き込む出来事だ。

同社がスピーディーかつ円滑に外国人ドライバーを受け入れられた背景には、長年にわたる「働きやすい職場環境づくり」と「DX（デジタルトランスフォーメーション）」の推進がある。

東総運輸は「働きやすい職場認証制度」の認証を受けており、国籍を問わず誰もが安心して働ける土壌が整っていた。

また、デジタルタコグラフを用いた動態管理システムなど、デジタル技術を駆使して安全管理や配車プロセスを合理化。言語の壁や日本の交通事情に対する不安を、テクノロジーと手厚いサポート体制で見事にカバーしている。

東総運輸では、採用した外国人スタッフを「グローバルドライバー」と位置づけ、多様な人材が切磋琢磨しながら共に成長できる企業文化を目指している。環境の変化を恐れず、柔軟な発想で挑戦を続ける東総運輸。この画期的なグローバル採用は、地域物流を支える新たな希望であると同時に、人材不足に悩む全国の運送事業者にとっての重要なモデルケースとなるだろう。

1期生であるアーマド フェブリズルフィカルさん（41歳）とアリス トリ ハンドコさん（27歳）は、2025年10月から厳格化され合格率30％といわれる外免切替に、学科、実技とも1回で合格し、免許合宿を経て、大型免許を取得している。1期生、2期生の計7名は大型免許取得後、新人研修も無事に終了。晴れて4月1日から独り立ちとなった2人に意気込みを聞いてみた。

■フェブリさん

「インドネシアとは異なる街並みや、伝票の漢字の表記も最初は戸惑いましたが、すぐ慣れました。従業員の皆様も優しく教えてくれるので、毎日が楽しいです」と流暢な日本語で話す。さらに「運送業は何よりも法令順守のうえ安全第一なので、ルールを守って仕事をすることに自信がある私には、とても向いている仕事であると改めて感じています」と語る。

■アリスさん

「4月1日にインドネシアで息子が生まれました。そんな記念日に、特定技能ドライバーとして独りで仕事を任されたのが嬉しいです。今まで以上に慎重に仕事をしたいと考えています。インドネシアでは小型トラックで野菜を運んでいましたので、大型トラックでいろんな荷物を運べるのは、ワクワクしています」さらに「将来は、日本で外国人ドライバーをサポートする仕事がしたいです」と語る。

2人は、1期生5名と2期生2名のリーダー的存在で、流暢な日本語や皆を引っ張る姿に、インドネシア人であることを忘れるくらいだ。

㈱東総運輸の齋藤伸吾社長いわく「正直、これほど優秀だとは思わなかった。もはや彼らなしでは仕事が回らないところまできている」。1期生、2期生にとどまらず、20人まで採用しようと検討されているようで、「フェブリさんをリーダーとして、彼ら1期生が後輩の指導までできるようになったら良いなと考えています」とまさにグローバルドライバープロジェクトの根幹を垣間みた。

4月1日には3期生2名も新たに入国し、早速、外免切替、大型免許取得に向け社内で練習しているようだ。

3期生2名

今回の取り組みは、単なる人材確保にとどまらず、地域社会や業界全体に対して大きな示唆を与えている。特定技能制度を活用した外国人ドライバーの受け入れは、今後ますます加速する物流需要に応えるための現実的かつ持続可能な選択肢であり、東総運輸はその先陣を切った存在だといえる。同社では、語学研修や生活サポート、運転技術のフォローアップなど、多角的な育成プログラムを整備し、外国人スタッフが長期的にキャリアを築ける環境づくりにも注力している。

こうした取り組みは、地域の雇用創出や国際交流の促進にもつながり、企業と地域が共に成長する好循環を生み出している。また、グローバル人材の活躍は、既存の日本人ドライバーにも良い刺激を与えている。異なる文化や価値観を持つ仲間と働くことで、職場のコミュニケーションが活性化し、相互理解が深まる。結果、チーム全体の士気向上や業務品質の底上げにも寄与しているという。

東総運輸が掲げる「多様性を力に変える物流企業」というビジョンは、スローガンにとどまらず、現場で確かな形となりつつある。今後、同社の挑戦が全国の物流企業に広がり、日本の物流業界がより開かれた、持続可能な産業へと進化していくことが期待される。

（国際経済交流協会　事務局）

外国人技能実習生情報

今回は、技能実習生たちが仕事の場では見せない〝もうひとつの顔〟に目を向けてみたい。彼らがどんな時間を過ごし、どんな場所に惹かれ、どんな思いで日本の生活を送っているのか。制度や労働力として語られがちな彼らの存在に、生活者としての息づかいが宿る瞬間を追ってみました。

仕事を終えた後の楽しみ、週末に出かけるお気に入りの場所、母国の味を求めて集まる仲間との時間。そこには、遠い国から来た若者たちが日本で自分らしく生きようとする姿がありました。

■実習生からのメッセージ①

せっかく日本に来ているのだから、一度は「日本らしい景色」を見てみたい。そんな気持ちで向かった先が河口湖です。富士山を望む湖として世界的に知られ、写真で見たあの風景を自分の目で確かめたいと思いました。

神奈川県の技能実習生
Bagas Ustantri Hudaさん

実際に訪れてみると、評判どおりの美しさでした。湖面の向こうにそびえる富士山、澄んだ空気、そしてちょうどよく晴れた空が重なり、思わず息をのむほどの景色が広がっていました。写真を撮る手が止まらず、気づけば時間を忘れて景色に見入っていました。日本での思い出に、これ以上ない一日になったと感じています。

■実習生からのメッセージ②

日本で暮らすインドネシア人として、横浜の魅力を自分の目で確かめたいと思い、まず「みなとみらい」を歩きました。近代的なビル群と海がつくる開放的な景色は、写真で見る以上に美しく、洗練された都市を感じました。ショッピングモールや観覧車が並ぶエリアは散策に心地よく、特に夕方から夜にかけてのライトアップは静けさと活気が同居する横浜らしい表情を見せてくれました。

長野県の技能実習生
AYUMI INDAH MAYLANIさんと
お友達

その足で向かった横浜中華街は、「みなとみらい」とはまったく違う世界が広がっていました。まるで異国に迷い込んだような雰囲気が漂います。多くの人で賑わい、活気に満ちています。整った日本の街並みの中に中華文化の華やかさが溶け込み、横浜という街の多様性を改めて感じました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

〝技能実習生のプライベート〟というと特別なもののように聞こえますが、実際は私たちと変わらない日常の積み重ねです。その時間に触れることで、制度の枠を超えた人としての魅力が見えてきます。

「外国人技能実習制度」に関心をお持ちの企業様は、当協会までお問い合わせください。

（国際経済交流協会　事務局）

書籍紹介

『佐藤一斎『言志四録』
（西郷隆盛手抄一〇一箇条）』
「日本人の克己の心と姿勢」感思抄録
窪田哲夫［簡訳］　定価1、800円＋税
インターネットで販売中

本書は、佐藤一斎「言志四録（げんししろく）」普及特命大使・窪田哲夫が、西郷隆盛が真読して撰んだ一〇一箇条を簡訳した一冊です。

『言志四録』は、江戸時代後期の儒学者である佐藤一斎が、後半生の約40年にわたって書き溜めた全一一三三箇条からなる語録。この語録は、西郷隆盛が座右の書として愛読したことで知られています。内容は、学問、思想、処世修養など多岐にわたります。

今まで「指導者のためのバイブル」として多くの経営者、リーダーに長く読み継がれてきました。

昨年、岐阜県恵那市岩村町に佐藤一斎記念館が開館され、メディアにも多数取り上げられました。岩村町の各所に、一斎が残した名言を刻した石碑が数多くあります。

寸鉄

憲法9条改正論議
維新の主張「自衛隊は『国防軍』に」が正しい

米田 建三

憲法改正論議が始まった。大きな焦点の一つは、言うまでもなく憲法9条の改正である。この点につき、連立与党である自民党と日本維新の会は見解が異なる。

日本維新の会は、憲法9条の戦力不保持をうたい、国の交戦権を認めない条項を削除し、「自衛隊を名実ともに軍に位置付け、国防軍を明記すべき」と主張している。しかし、自民党はそのいわゆる不戦条項は残したまま、自衛隊を明記する条項を付け加えるという案だ。結論を先に言うならば、維新案はまったく正しい。自民案は、いまだに国民大衆の防衛に関する意識が世界常識に至らずとの思いから発した、究極の大衆迎合と言ってもいい。自民の認識が当たりなら、悪いのは空想的平和主義を鼓吹してきた左派オールドメディアと、それに乗せられてきた愚民が悪いということになるが…。

そもそも、憲法に自衛隊という個別名称を記してしまったら、将来、名称変更をするたびに憲法改正手続きをすることになる。せめて、『自衛のための実力組織』とし、それに基づき自衛隊が設置されているというスキームにすべきだろう。

悲惨な世界大戦が終わるたび、世界はそれを繰り返さぬため新秩序を作ってきた。第一次大戦後の国際連盟、第二次大戦後の国際連合がそれだ。国連憲章ならびに関連法規の定めるところは、「国家間の個別戦争禁止」「ただし、自衛のための個別的自衛権の行使と同志による集団的自衛権の行使は可」というものだ。それに基づき、各国は軍隊を保持している。国際社会において、国内社会のように強制力を持った公正中立な紛争裁定組織がない以上、当然な話だ。

戦後、戦勝国、なかんずくアメリカによって押し付けられた、いわゆる平和憲法は、明らかにそれを作文した彼らの筆が滑り過ぎた。そのまま読めば、明らかに日本は自らを守る手段を持たずに、丸裸で生きていけということになる。明治維新後、急速に台頭し欧米に伍した日本の再起を防ごうという意志がありありだった。

とはいえ、中国大陸で共産主義が台頭し、朝鮮戦争が勃発したりもすると、アメリカは日本に米軍の補助的軍事力は持ってもらいたいし、そもそも、自衛権をまったく奪ってしまったら、すべてアメリカの経費で日本を守らなくてはいけなくなる。

かくして、世にも奇妙な憲法といえども、国連憲章が認め、国家の自然権ともいえる自衛権を否定していないという解釈で自衛隊が誕生し、以後ぎりぎりの解釈拡大を続けて、防衛や国際貢献に資する努力を続けてきた。私たち国防族の間では、複雑怪奇な防衛関連法体系を指して、「温泉旅館の建て増し建築」と呼んだものだ。古い旅館が抜本的な改築を避けて、ご都合主義で次から次へと小部屋や施設を建て増す姿になぞらえたのだ。

もはや、限界である。アメリカは庇護者の立場を放棄しつつある。日米同盟を堅持しつつも、他の同志国と連携して自国と世界の平和維持にあたっていくためには、いまだに行動制限のある「軍ではない自衛隊」を脱し、国際標準で必要かつ十分な行動ができる国防軍にならなければいけない。

歯止めがきかなくなるというバカがいる。国際法がある。国連憲章がある。関連国内法規がある。そして何よりも戦後確立したシビリアンコントロールがある。自衛隊の最高司令官は内閣総理大臣だ。戦前の日本は、軍は天皇が統帥する天皇の軍隊であって、国家国民の軍ではなかった。天皇統帥権を盾に、政府の方針を無視して軍が暴走したゆえんである。

国家なくして人類の歴史は始まり、農耕の開始とともに社会組織の複雑化、国家の誕生へと推移した。そして、国家間の利害の対立が生まれ、今日もなおその繰り返しである。国家消滅ユートピアの実現は、まったく見通しが立たない。ならば、生存共同体である所属国家を守るしかないではないか？ 防衛体制強化に反対する左翼に告ぐ。自らの幼い観念で、国の将来を犠牲にするな！

疾風

伝統を尊び、皇位の男系継承踏まえた皇室典範改正を

衆参正副議長と各党、各会派の全体会議で、安定的な皇位継承策につながる議論が進められている。

今上陛下と秋篠宮皇嗣殿下の次の世代の男性皇族が、悠仁親王殿下お1人であるためだ。このままでは、悠仁親王殿下が即位される頃には、他に皇族がほとんどいなくなる恐れがある。

そこで政府有識者会議が皇族数確保に関する報告書をまとめ、岸田文雄内閣（当時）がそれをそのまま政府報告書として、2022年1月に国会へ提出した。

それから4年4カ月もたった。今国会で必ず結論を得て皇室典範改正を実現し、皇位継承の安定化を図ってほしい。日本の国の根幹に関わるからだ。

政府報告書は、今上陛下から秋篠宮皇嗣殿下、悠仁親王殿下へという皇位継承の流れをゆるがせにしてはならないとした上で、①女性皇族が結婚後も皇族身分を保持し、非皇族出身の夫と子は皇族としない ②養子縁組などによる旧宮家の男系男子からの皇族入り―という案を示した。

天皇の正統性は歴史と伝統に基づく継承の積み重ねから生まれる。初代神武天皇から第126代今上天皇まで継承の経緯が伝わっている。そこから導き出せるのは皇位継承の最大原則は男系（父系）継承ということだ。

①②案は、皇族数を確保する方策だが、②案の実現が決定的に重要な意味を持つ。皇位継承権を有する男性皇族の数を増やすことになるからだ。

①案は、式典などの公務に携わる皇族を増やせるが安定継承とは関係がない。皇統の不安は解消しない。

国会の全体会議では、中道改革連合以外の政党、会派は立場を提示済みだ（5月1日現在）。

すでに、政府報告書が示した、皇統を護ることにつながる方策への賛同が国会の大勢になっている。自民党、日本維新の会、国民民主党、参政党、公明党、チームみらい、日本保守党の7党がそれである。

この7党は政府報告書が示した、今上陛下から悠仁親王殿下までの継承の流れをゆるがせにしないことと、旧宮家男系男子からの皇族入りという②案に賛同している。保守党以外の6党は①案にも賛成している。

7党の議席数の割合は、衆議院で87％、参議院で75％で、文字通りの国会の大多数となっている。

政府の有識者会議、政府、そして国会の大多数を占める7党は、きちんと検討した上で、皇位継承の最大原則である男系継承を踏まえた方策が望ましいという結論を出したわけだ。

中道改革連合には5月中に全体会議へ党の見解を報告することが期待されている。立憲民主党と公明党の衆院側が合流した中道改革連合のうち、公明出身議員は政府報告書の内容に賛成する立場だ。立憲民主党出身議員の一部には女系継承を認めたり、女性皇族の夫と子も皇族にしたりするという、皇室の歴史に1つの前例もない方策を望んでいる者が少数だが存在している。女性皇族の夫や子を皇族とするのは皇族に女系継承を認める暴論で、皇位の男系継承まで崩し、皇統断絶を招くトロイの木馬になりかねない。

中道改革連合も、皇室の歴史と伝統を尊重し、政府報告書の内容に沿った見解を示してほしい。

産経新聞社とFNN（フジニュースネットワーク）が4月に実施した世論調査で、旧宮家の男系男子を皇族に迎える案への賛成は58％、反対は31・9％だった。女性皇族の結婚後の身分の在り方では「女性皇族は結婚後も皇族とし、その夫や子は皇族としない」が最多で35・8％、「現在と同じく女性皇族は結婚後は皇族の身分を離れる」は29・7％、「結婚後も皇族とし、その夫や子も皇族とする」は28・9％だった。皇族の女系継承を認める声は少数にすぎない。

今特別国会で男系継承を守り抜く皇室典範改正を実現し、旧宮家の男系男子に皇族入りをお願いしたい。

産経新聞社上席執行役員論説委員長
榊原　智

榊原智　産経新聞社上席執行役員論説委員長。日本記者クラブ理事。国際安全保障学会理事。昭和40年生。東大文学部卒。防衛大学校総合安全保障研究科（修士課程）卒。

街道

法務省によると外食業の特定技能1号は在留者数が約4万6千人に達し、上限5万人に到達見込みとなったため、新規の在留資格認定証明書交付や資格変更が原則停止された。新規受入が停止されたことで、外食産業の人材確保は再び不安定になっている。

また、特定技能に依存した採用計画は見直しを迫られ、企業は既存人材の囲い込みや転職市場での競争に追われている。

結果として新規出店計画の中止や営業時間の短縮を余儀なくされた企業も多く出ている。

こうしたなかで重要性が増しているのが、技能実習生や2027年4月から始まる育成就労といった基礎的な人材育成ルートだ。

技能実習は業種によっては特定技能への移行が制度的に確保されており、育成就労は段階的な技能習得を前提とするため、制度上限の影響を受けにくい。

これからは特定技能だけに依存せず、複数の制度を組み合わせた持続的な人材確保体制が不可欠だろう。

公益社団法人 国際経済交流協会
代表理事 永井 一紀